

民俗芸能衣装の製作に関する調査・研究

—「番楽」翁衣装の事例—

Research in Costume Production in Performing Folk Arts

Case of "Okina" Costumes Used in "Bangaku"

角谷 彩子

Ayako Kadoya

要旨

日本の伝統芸能には、専門の役者による能や歌舞伎など舞台芸術のほかに、非専門家即ち庶民によって伝承されてきた民俗芸能がある。民俗芸能の学術的研究が始まったのは近代以降のことであり、特に衣装については現在までほとんど研究がなされておらず、文献資料や実物資料も少ない。また社会情勢の変化や金銭的な影響を受け、古い時代の形を維持・継承されなかった衣装が数多くあり、芸能の本質が変質する可能性が予想される。本研究では山伏系神楽「番楽」の演目「翁」を対象に、秋田県南部地域の番楽4つの現存する古衣装の染織技法とその材料について、科学的検査を含めた分析調査から検討した。その結果、染色技法は描絵や型染、筒描染などが用いられ、織物は色を染めた織糸によって平織りで縦縞模様が表されていた。着色剤は染料と顔料が使われており、染料は主に藍などの植物染料、顔料は朱や胡粉など古くから絵画や染織品に用いられてきたものであった。また全ての衣装の素材は綿で、その多くは江戸中期～明治期にかけて製作されたものであることが分かった。

●キーワード：民俗芸能衣装 (costumes of performing folk arts) / 技法・材料 (materials & techniques) / 科学検査 (scientific examination)

I. はじめに

国内の民俗芸能に関する学術的研究は1927年「民俗芸術の会」結成を機に始まったが¹⁾、特に衣装については民間伝承という点から記録資料が乏しく、現在までほとんど研究がなされていない。民俗芸能の衣装は芸能発生当初から製作・着用されてきたと思われ、民俗学や服飾史学にとって重要な研究対象であるといえる。したがって、現存する衣装を調査することは、衣装の伝承だけに留まらず、民俗芸能自体の伝承や存続に繋がる意味を持つものと考えられる。

昨年、筆者は秋田県北秋田市阿仁の根子集落に伝わる民俗芸能舞曲「根子番楽」の翁衣装について科学的検査を含めた調査を行い、多くの知見を得た²⁾。「番楽」とは秋田県と山形県北部に伝承されている山伏系神楽の一種で、古くは修験道信仰に伴う芸能である。信仰の対象となった太平山や烏海山の山麓にまとまった分布が見られ、芸態によっては大成以前の能の古態を留めているといわれる。1993年の秋田県の調査³⁾によると番楽は42市町村の約140地域で伝承が確認され、県内の芸能種別の中では最多であったが、近年は社会情勢の変化により消滅したものも少なくない⁴⁾。また番楽衣装については

資料不足や運営資金が少ないこと、芸能の観光化など複数の要因によって当初の形が維持・継承されず、衣装の模様や色、形状などの変容が余議なくされてきた。こうした衣装の変化は同様の境遇にある他の民俗芸能の衣装にも共通して見られ、芸能の本質との乖離が問題視されている⁵⁾。衣装の変容を最小限に留め、古い時代の形を伝承していくためには、現存する衣装を調査し、どのように製作されたのか明らかにする必要がある。

こうした現状から本研究では、現存する古い番楽衣装の染織技法とその材料について科学的検査を含めた分析調査から検討する。対象とする衣装はおよそ100曲ある山伏系神楽の演目の中でも、多数地域に共通して伝わっており、番楽専用染や織の段階から製作された衣装であることが多い「翁」⁶⁾の舞の衣装⁷⁾とした。本稿では秋田県南部地域の番楽4つについて調査した結果を述べる。

II. 研究対象

II-1. 役内番楽

「役内番楽」(市指定無形民俗文化財)は霊峰「神室山」の麓に位置する秋田県湯沢市秋ノ宮の役内集落に伝

承されている。由来を記した文献資料は現存していないが、口承では江戸中期頃、神室山の修験者が集落の若者らに伝授したという説と、鳴子（現宮城県）から来た菅半十郎という人物によって諸道具などと共に伝授したとする2説がある。

役内番楽に関する文献資料の多くは現存しておらず、衣装についてはいつ、どこで、誰が製作あるいは購入したのか不明である。役内番楽の「翁」は既に途絶えているが、衣装は「蕨折り」という3人舞（女形・爺翁・しょっちく爺）の演目で爺翁役が着用するため、最近まで使用されてきた。翁の衣装道具で唯一年号が記された面は、裏側に「明治廿五年（1892）九月十五日十八日迄菅直右衛門」と墨書きがある。この人物は集落の人であることが分かっているが、衣装がこの時に同時に製作されたものであるかは不明である。

II-2. 本海獅子舞番楽 二階講中

「本海獅子舞番楽」（国指定重要無形民俗文化財）は霊峰「鳥海山」の麓に位置する秋田県由利本荘市鳥海町の13地区でそれぞれに伝承されている。寛永年間（1624-44）頃に京都醍醐寺三宝院の修験僧である本海行人（本海坊）によって伝授されたものと伝えられ、本海番楽という名称はその人物の名に因む。「二階講中」の二階は地名、講中は番楽の伝承団体を指し、13地区の内の二階という地域で伝承される番楽であることを意味している。

本海獅子舞番楽は戦時中に番楽を休止していたが、戦後復活して衣装道具を新しく作り直す際、当時の形を維持するため古いものを模して製作されたようである。二階講中の「翁」は、戦後の昭和30年頃に作られた衣装で今も演じられている。本海番楽の衣装は基本的に全て兼用で使われ、翁衣装の長襦袢と袴は他の演目でも着用される⁸⁾。翁の扮装は長襦袢の上から袴を履き、襦袢の上に狩衣を着る。長襦袢と袴は現在使用される衣装よりも古い衣装が現存しているが、狩衣は見つかっていないため、本研究の調査から狩衣を除外した。

II-3. 冬師番楽

「冬師番楽」（国選択無形民俗文化財）は鳥海山麓に位置する秋田県にかほ市の冬師集落に伝承されおり、本海流番楽の系統である。文書が無いため由来は定かでないが、口承では平家の落人が土着して狩や農耕のかたわら、女房達が昔習い覚えた舞や踊りを子孫に遺したとい

う説と、出生不明の兄弟の兄が坂ノ下（由利本荘市）、弟が冬師に住み着いて共に番楽を創始したとする説がある⁹⁾。

冬師番楽の「翁」は後継者不足のため、明治期頃から徐々に途絶えていったと思われる。翁の衣装は演目「蕨折り」に出てくる翁役と兼用であるが、その他の演目は固定の衣装が無く、幾つかの着物や袴を着回して使用する。翁の扮装は演者私物の浴衣の上に袴を履き、羽織を着用する。全ての衣装道具に関する記録資料は無く、どのように製作されたのかは不明である。

II-4. 釜ヶ台番楽

「釜ヶ台番楽」（国選択無形民俗文化財）は鳥海山麓に位置する秋田県にかほ市の釜ヶ台集落に伝承されている。伝承時期は不明だが、本海獅子舞番楽が伝授された頃に伝わったといわれ、本海流番楽の系統である¹⁰⁾。また冬師番楽から伝わったとする説がある。釜ヶ台と冬師は芸態や演目に共通点が見られ、両者の獅子舞に纏わる伝説¹¹⁾もあることから、関係性の深さがうかがえる。

釜ヶ台番楽の「翁」はここ数年演じられていない。衣装の羽織は「蕨折り」「もちつき舞」の演目と、袴は他の演目と兼用である。衣装に関する記録が無く詳細は不明だが、畳み方や洗い方（石鹸を使用せずに水洗い）など衣装の扱いについては先輩から指導されていたようである。翁の扮装は半襦袢の上に袴を履き、羽織を着用する。

III. 研究方法

衣装に用いられた染織技法と材料について、目視による衣装の実物資料調査と科学的検査による分析を行い、それぞれの調査結果を照合して検討・考察を行った。目視の状態では衣装の染織技法と組織の状態を調査し、繊維の染色状態は色毎に繊維を採取し、サリチル酸エチル（率屈折1.527）でマウントしてから光学顕微鏡による観察を行った¹²⁾。本研究で用いた科学的検査について下記に詳細を示す。

III-1. 蛍光 X線分析法（XRF）

試料に X 線を照射することで発生する、元素固有の蛍光 X 線を検出し、エネルギーや分光結晶で分光することで試料に含まれる元素の分析を行う。色料が顔料の場合、検出される元素とその強度から同定が可能となる。分析は一般財団法人材料科学技術振興財団に委託

し、その分析結果から顔料の同定を筆者が行った。使用した装置、および測定条件は以下の通りである。

装置：XGT7200V（堀場製作所製）

分光法：エネルギー分散型 X 線分光法（ED-XRF）

X線管：Rh, X線検出器：シリコンドリフト検出器

管電圧：30kV, 管電流：0.655mA

ビーム径：約 1.2mm, 測定時間：1800 秒

測定雰囲気：大気, 検出可能元素：Na~U

Ⅲ-2. 紫外・可視分光法（UV-VIS）

紫外線から可視光線までの領域の光を試料に透過させ、その光の強度を測定することで試料の吸収スペクトルや透過率が得られる。染料の成分は各々特有の波長の光を吸収する¹³⁾。染料の色見本帳などから試料の色と近いと思われる染料を用いて染色した供試品と、試料のスペクトルを観測し、双方の比較から試料中の染料の同定を行う。供試品は筆者が作製し、分析は株式会社島津テクノロジーに委託した。使用した装置、および測定条件は以下の通りである。

装置：島津分光光度計 UV-3600

マルチパーパス大型試料室 MPC-3100(積分球)

測定値：反射率, 波長範囲：240 nm -800 nm

Ⅲ-3. 高速液体クロマトグラフィー（HPLC）

混合物（試料）から液体（染料）を抽出して成分を分離し、定性分析と定量分析を行う。今回は藍の色素であるインディゴ成分の含有について検査した。試料溶液から得られたピークのスペクトルを、藍（標準品）のスペクトルと比較し、類似度 0.95 以上のものを同定した。分析同定は株式会社島津テクノロジーに委託した。HPLC 分析条件は以下の通りである。

カラム：Shim-pack VP-ODS (150mm L. × 4.6mm I.D.)

移動相：10mM りん酸（ナトリウム）緩衝液 pH2.6
アセトニトリル

流量：1.0mL/min, 試料注入量：5μL

検出器：フォトダイオードアレイ検出器（SPD-M20A）

Ⅳ. 研究結果

Ⅳ-1. 役内番楽

(1) 翁衣装の所見（写真 1）

衣装の単衣は背中肩部に羽を広げた灰色の鶴、全体に灰色と赤色の紅葉が描かれている。鶴と紅葉の裏側は背景の茶色と交わっておらず、輪郭や描写の細かい線は白抜

きされている。これらのことから、糸目糊を置いてから模様の内側に色を挿し、輪郭線に沿って背景の色を染める、筒描染の手法がとられていると考えられる。袴は糸目糊で流水と植物を描いた後に染色されており、単衣と同じ筒描染によるものであると思われる。単衣の袖の形は広袖で、共衿の黒布は最近縫い付けられたものである。素材は単衣・袴共に綿で組織は平織りである。単衣の生地幅は約 35cm で織密度は経糸 26 本、緯糸 24 本/cm、糸は Z 撚りの単糸である。袴の生地幅は約 32cm で織密度は経糸 18 本、緯糸 15 本/cm、糸は S 撚りの単糸である。

単衣の茶色部と袴の青色部は繊維内部に着色が見られるため染料による染色、単衣の赤色部と灰色部は繊維内部の着色が無く、表面への固形物の付着が確認されたため顔料による着色であると判断した。

(2) 分析結果

単衣の蛍光 X 線分析（以下 XRF）は、測定面積約 10 cm × 10cm の範囲で面分析を行い、その結果を図 1 に示す。赤色部（鶴の頭）からは水銀 Hg、リン P、硫黄 S、珪素 Si の元素分布が確認された。Hg と S の強度が高いことから硫化水銀を成分とする赤色顔料の朱（HgS）であると推測される。灰色部（鶴の顔・嘴）からは特徴的な元素は検出されなかったが、カルシウム Ca の分布が確認されたため、墨に胡粉（CaCO₃）を混合したものと考えられる。茶色部（鶴の嘴の穴）からは鉄 Fe、Ca の分布が確認された。Fe の強度が高いことから酸化鉄系顔料のベンガラ（Fe₂O₃）であると推測される。白色部（鶴の首）からは元素の分布が確認出来なかったため、着色されていない布地の部分であると思われる。鶴の嘴上において亜鉛 Zn と塩素 Cl が線状に分布していることが確認された。

染料による染色と思われる茶色部（背景）からは Fe の分布が確認されたことから、鉄媒染剤を使用したと考えられる。茶色部の染料分析に紫外可視分光分析を実施し、茶色部とよく似た色調の植物染料、シブキ（やまもも）を用いて分析の比較試料を作製した。豆汁で地入れを行った綿布に、シブキを刷毛で塗布し、鉄媒染液で媒染して分析に供した。図 2 に反射スペクトルを示す。茶色部および供試品からは特徴的なドロップ・ピークは観測されず、双方に 600 nm 付近の波長領域で反射率の増加が見られることから、近い UV 波長を持っているといえる。結果から同じ染料であると断定はできないが、茶

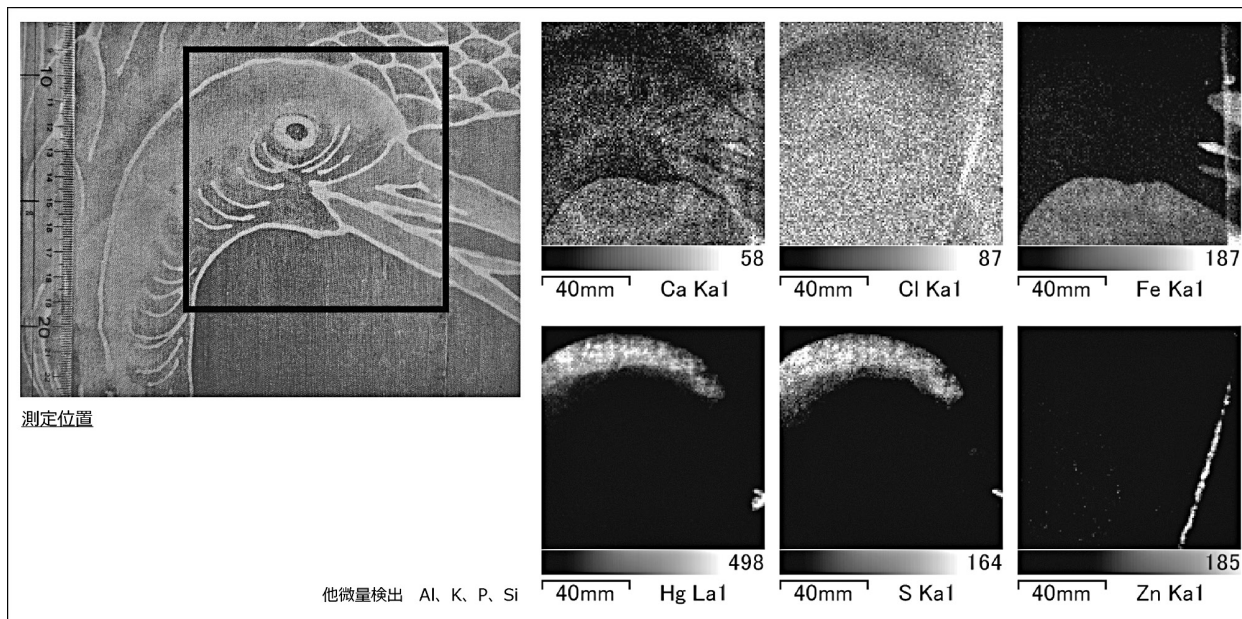


図1 役内番楽単衣 鶴頭部 XRF 結果

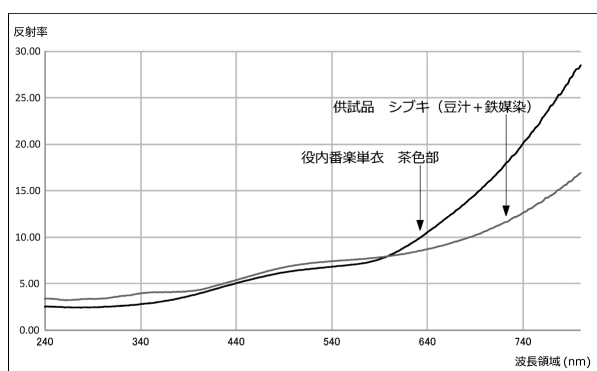


図2 役内番楽単衣と供試品の反射スペクトル

色部に用いられた染料はシブキである可能性が高いと思われる。袴は高速液体クロマトグラフィー（以下 HPLC）による分析の結果インディゴが検出され、藍による染色であることが確認できた。

IV-2. 本海獅子舞番楽 二階講中

(1) 翁衣装の所見 (写真2)

衣装の長襦袢は地色が白色で背面左袖から身頃にかけて黒線で虎、全体に緑色の笹の葉が描かれている。糊や型を使用した形跡は無く、墨で輪郭線を描いた後に笹の葉を着色したものと考えられる。袴は後腰部にゴザが縫いつけられた通称「ゴザ袴」で、前膝部に熨斗、後腰部に鶴の模様がある。模様が白抜きになっていることから、模様を彫った型紙を布地の上に置き、糊で防染した後に染色されている。鶴の顔の表情は後から描き足した

ものと思われる。素材は長襦袢・袴共に綿で組織は平織り、糸はS撚りの単糸である。長襦袢の生地幅は約33.8cmで織密度は経糸19本、緯糸16本/cmである。袴の生地幅は約33cmで織密度は経糸15本、緯糸12本/cmである。

袴の黒色部と長襦袢の灰色部は顔料による着色で、全体の白色部から着色料は確認されなかった。袴の緑色部は、微粒子の付着と繊維内部が黄色に染まっている様子が確認されたため、黄色と青色の2色の染料が用いられた可能性が考えられる。長襦袢の緑色部は繊維表面に青い粒子の付着が確認されたが、淡色のため顕微鏡による観察では染料か顔料か判断出来なかった。

(2) 分析結果

長襦袢の XRF 面分析の結果を図3に示す。灰色部（輪郭の周辺）および黒色部（輪郭線）からは特徴的な元素は確認されず、墨を用いて水などでぼかしながら描いたものと思われる。緑色部（笹の葉）からは微量の Fe の分布が確認されたことから、Fe を含む緑色顔料の緑土（緑色系岩石粉末）¹⁴⁾ であると推測される。

袴の緑色部からは HPLC 分析の結果、インディゴが検出された。黄色染料については、XRF 分析で染色の際に用いられる媒染剤の分析を行った（図4）。XRF は透過能力を有し、袴の裏地のゴザ部に存在する元素も検出されるため、袴の表地と裏地の2カ所測定したデータを重ね合わせ、裏地よりもスペクトル強度の高い Si、

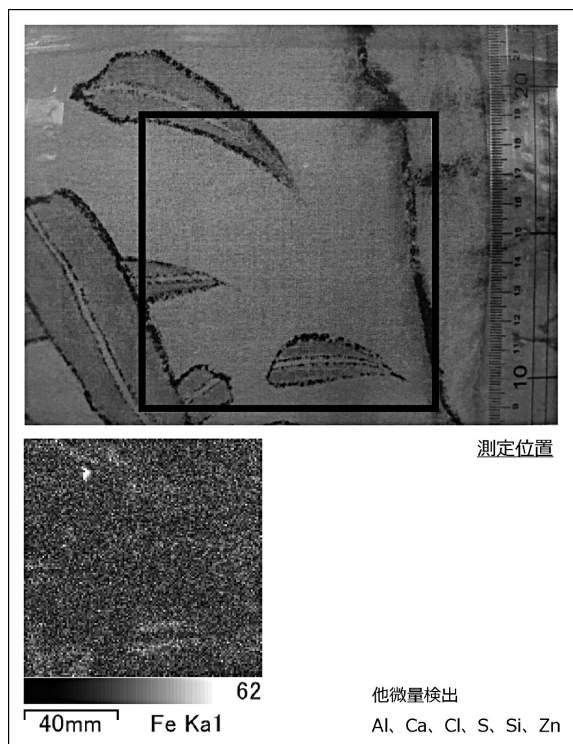


図3 本海獅子舞番楽二階講中長襦袢 XRF 結果

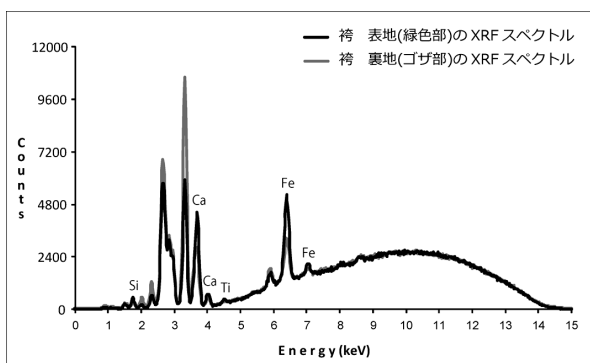


図4 二階講中袴 表地と裏地のXRF スペクトル

Ca、チタン Ti、Fe が表地に存在する元素であると考えられる。Ca と Fe の強度が高く、このうち Ca は藍染めの際に用いられる灰汁の成分¹⁵⁾ が検出された可能性があることから、黄色染料は鉄媒染が行われたと推測される。黄色染料の特定には至らなかったが、袴は藍と黄色染料による重ね染めが行われたと考えられる。

IV-3. 冬師番楽

(1) 翁衣装の所見 (写真3)

衣装の羽織は白地で堰出しの菊唐草模様で、模様を彫った型紙を使って糊で防染した後、染色したと思われる。合羽や被布に似た四角形の衿元を紐で結んで留めるつくりになっており、後身に長い別裾が縫い付けられて

いる。袴は青、白、水色の3色の織糸によって縦縞模様が織られており、形状は中に裾が無いスカートタイプである。素材は羽織・袴共に綿で組織は平織りである。羽織の生地幅は約34.8cmで織密度は経糸21本、緯糸17本/cm、糸はS撚りの単糸である。袴の生地幅は約35cmで織密度は経糸34本、緯糸24本/cm、糸はZ撚りの単糸である。

袴の青色部は染料による染色、羽織の青色部は繊維表面への固形物の付着が見られたが、部分的に繊維内部の着色の様子も確認された。

(2) 分析結果

羽織の青色部からは HPLC 分析の結果、インディゴが検出され、藍による染色であることが確認できた(図5)。袴の青色部からはインディゴが検出されず、合成染料による染色であると考えられる(図6)。

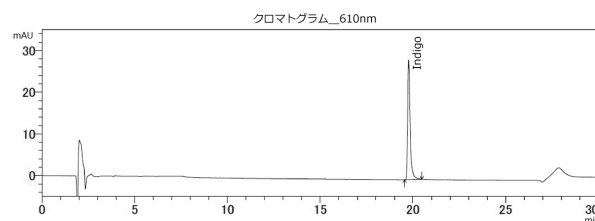


図5 冬師番楽羽織 HPLC クロマトグラム

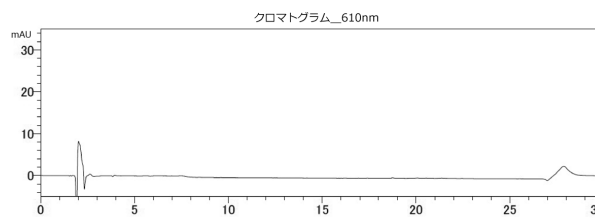


図6 冬師番楽袴 HPLC クロマトグラム

IV-4. 釜ヶ台番楽

(1) 翁衣装の所見 (写真4)

衣装の羽織は青地で蔦が白抜き、花草が括りの菊唐草模様で、型紙を使用した型染の技法で染められている。衿は冬師番楽の翁衣装と似た四角形で、衿元の紐を結んで留めるつくりになっている。袴は青、白、水色の3色の織糸によって太い縦縞模様が織られている。素材は羽織・袴共に綿で組織は平織り、糸はS撚りの単糸である。羽織の生地幅は約32.2cmで織密度は経糸17本、緯糸13本/cmである。袴の生地幅は約34cmで織密度は経糸21本、緯糸19本/cmである。

羽織・袴共に繊維内部の着色が見られることから、染料による染色であることが確認された。

(2) 分析結果

羽織と袴の青色部からはHPLC分析の結果、インディゴが検出され、藍による染色であることが確認できた(図7, 8)。

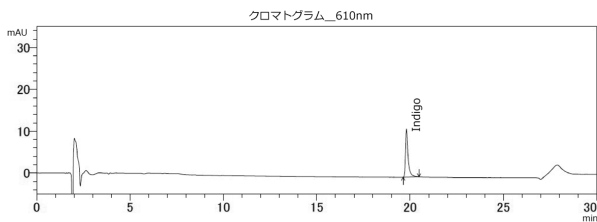


図7 釜ヶ台番楽羽織 HPLC クロマトグラム

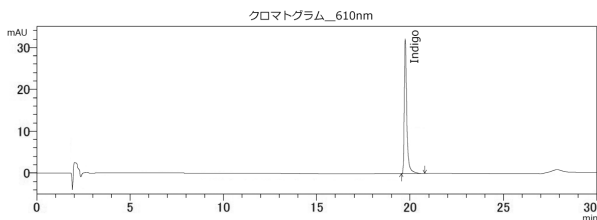


図8 釜ヶ台番楽袴 HPLC クロマトグラム

V. 考察

全ての調査結果を表1に示す。目視による衣装の実物調査の結果、衣装の生地は全て綿であることから、綿が大衆衣料として普及した江戸中期以降に作られたと考えられる。綿織物は時代の経過に伴い、織密度が高くなる傾向にあることが河村・山本(1997, 1998)による江戸後期～明治期の縞帳(縞織物見本帳)調査¹⁶⁾などから報告されている。織密度には地域差がみられるが、明治以前の江戸期の平均的な経糸密度は18～20本/cmであったと思われる。また糸の撚り方向は、手紡ぎ糸はS撚りであるのに対し、機械紡績糸の多くはZ撚りである¹⁷⁾。西洋の紡績機械と紡績技術は、幕末期に日本へ輸入され始めたが、本格的に全国へ普及するのは明治10年代以降であったと思われる¹⁸⁾。これらの点から、役内番楽の単衣と冬番楽の袴は明治期以降に製作されたものである可能性が高い。今回調査した衣装の多くは、各番楽が創始したとする時代当初のものではなく、年代が下がってから新しく作られたと考えられるが、これらが古い時代の衣装をどの程度模して製作されたのかは不明である。

以下に各番楽衣装の結果について考察を述べる。

V-1. 役内番楽

単衣に使われた朱、胡粉、ベンガラはいずれも古代から絵画や建造物に使用されてきた顔料で、紅型などの染織品にも用いられている。顔料は不溶性であり、単体では繊維に染着しないため固着剤を必要とする。大豆を乳状液化した豆汁は、顔料の固着剤として古くから一般的に用いられており、単衣に使われた顔料の固着剤もこの豆汁である可能性が高い。豆汁の主成分であるグリシニン(タンパク質)は布からの抽出が難しく、成分の有無について検査することは出来なかった。

鶴の嘴上に線状に分布しているZnとClは、塩化亜鉛($ZnCl_2$)であると考えられる。塩化亜鉛は主に防臭剤や消毒剤、木材防腐剤、電池などに用いられることから¹⁹⁾、染色の過程ではなく、衣装として使用する最中に付着した可能性が高いと思われるが、原因は不明である。

V-2. 本海獅子舞番楽 二階講中

国内の文化財に用いられた緑色顔料の多くは、銅Cuを酸化させた緑青($CuCO_3$)であるが²⁰⁾、長襦袢の緑色部からはCuの分布は確認されなかった。緑色部から検出されたFeは、繊維表面に付着している顔料の元素から検出されるXRF強度としてはかなり微弱である。他にFeを含む染料として、ニトロソ染料のナフトールグリーンB(Naphthol Green B)が挙げられるが、酸性染料であるため綿には染着しない。また衣装は着用した後、洗濯する過程で退色し、Feの検出強度に影響が出たことも考えられる。これらの点から、長襦袢に用いられた緑色顔料は緑土であると結論づけた。顔料の固着剤は役内番楽と同様に豆汁が使われたものと思われる。

天然染料で緑色を染める場合、古くから藍と黄色染料による重ね染めが行われてきた²¹⁾。黄色染料は主に黄檗や刈安、古いものは槐が用いられ、藍で下染してから黄色で染め、媒染する。これらの黄色染料はアルミ媒染(灰汁、明礬)で明るい黄色に染まるため、藍と重ねて緑色を染める場合は通常よく用いられるが、今回の調査結果から袴には鉄媒染剤が用いられた可能性が高い。そのため、袴は明度の低いくすんだ緑色になったと考えられる。

V-3. 冬師番楽と釜ヶ台番楽

冬師番楽と釜ヶ台番楽の衣装は模様や形状、染色技法など共通する点が多く、芸態だけでなく衣装の面においても互いに影響関係にあったことが推測される。羽織の藍染による菊唐草模様は、江戸後期～明治期にかけて広く使われた蒲団地や夜着の模様と類似している。綿が普及した江戸中期頃、藍型染（中形）が始まり、全国各地の紺屋で染められるようになった。秋田県含む東北地方からも類似した模様の裂が多数見つかっている。これらの点から、羽織は蒲団地などの古裂から製作された可能性があり、番楽の衣装用に染められた模様ではなく、偶然このようなデザインになったことも考えられる。

冬師番楽の袴は合成染料による染色である。インディゴを含まない青色の合成染料は、主にアントラキノン系やフタロシアン系²²⁾が使われる。いずれも20世紀初頭から中期にかけて開発、工業化された染料であることから、袴はかなり新しい時代に作られたものと推測される。

VI. おわりに

番楽の翁衣装は描絵や型染、筒描染、織縞など様々な技法によって製作されていた。また着色剤は染料と顔料が使われており、染料は主に藍などの植物染料、顔料は朱や胡粉、ベンガラ、緑土などであることが明らかとなった。しかし役内番楽の単衣と、本海獅子舞番楽二階講中の袴の一部染料については本研究で特定することが出来なかった。衣装の破壊を最小限に留める科学的検査では、分析の方法に制限があるため、より詳細な検査を行うことが困難となる。また衣装の保存状態によっては異物が付着している場合や、変色または退色による分析数値への影響など、調査を行う上で見極めが難しい点が多い。今後より多くの調査を行い、データを蓄積することで、分析結果の確度の向上に繋がると考えている。

今回の調査で各番楽の保存会へ話を伺ったところ、各伝承地で保管されている番楽の古い衣装道具や文献資料の多くは火災、盗難、紛失によって無くなったとする話が非常に多かった。衣装については当時の記憶を頼りに前の衣装と似せて作り直したケースと、全く別物になったケースがあり、後者の場合は金銭面の問題や当時の保存会メンバーの意向といった理由が挙げられた。また当時を知る人が亡くなったため、衣装の詳細が分からないというところもあった。番楽をはじめ、民俗芸能の多くは少子高齢化や過疎化の影響を受け、存続の危機にさら

されていると同時に、衣装の消失も危ぶまれるため調査の緊急性を要する。今後は残りの番楽衣装の調査と、既に途絶えた番楽の衣装の調査方法についても検討しつつ、引き続き調査を進める予定である。

謝辞

本研究は一般財団法人守谷育英会2016年度研究助成を受けたものである。本研究を行うにあたり、役内番楽保存会の由利好美様、本海獅子舞番楽伝承者協議会の松田訓様、冬師番楽保存会の佐藤三造様、釜ヶ台番楽保存会の佐藤一也様をはじめ、各番楽保存会の皆様にご協力頂きました。あわせて厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 民俗学事典編集委員会『民俗学事典』丸善出版、2014、p.606
- 2) 角谷彩子『民俗芸能「根子番楽」衣装の調査・研究—「翁舞」の襦袢—』服飾文化学会誌 vol.17、2016、p.71-80
- 3) 秋田県教育委員会『秋田県の民俗芸能—秋田県民俗芸能緊急調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第227集、1993
- 4) 平成22～24年の調査で確認された秋田県内の番楽・獅子舞の数は82件となっている。(熊谷嘉隆『秋田県の民俗芸能：現状と課題そして今後について』アジア地域研究連携機構紀要2巻、2016、p.1-8)
- 5) 島根県の「石見神楽」、岡山県の「備中神楽」の衣装について時代と共に華美化し、神楽としての本質から離れつつあると述べている。(坪井有希『「備中神楽」衣装の色彩』吉備人出版、2011、p.114-126)
- 6) 翁とは老翁を意味する言葉であるが、芸能では老人の姿をした「神」を意味する。舞の内容は翁が自分の素性を語り、土地を祝う言葉を述べながら舞台を踏みまわって五穀豊穡、息災延命を祈る。足拍子を踏む動作に信仰的な意義があるといわれる。(三隅治雄『日本民俗芸能概論』東京堂出版、1972、p.109-114)
- 7) 番楽の衣装(着物や袴)は私物の着物の着用、あるいはそれらを縫い直して衣装にしたものが多い。しかし翁衣装は、他の番楽の翁との共通性などから、番楽専用に使われ織りの段階から製作されたと推測される。
- 8) 長襦袢は演者・囃子方含めて揃いのものを着用する。演者の場合はその上から演目に応じた衣装や鎧などを着用する。翁の袴は「三人立」「伊加」の演目と兼用で使用される。
- 9) 公益財団法人明治安田クオリティオブライフ文化財団『わが国における地域の伝統文化—平成十三年度～平成二十二年 度助成先のあらまし—』2012、p.52
- 10) あきた県民文化芸術祭2016参加事業『第7回鳥海山伝承芸能祭』パンフレット、2016、p.8
- 11) 冬師番楽の獅子舞の首に赤布が付いている理由は、釜ヶ台の獅子舞に噛まれたため、釜ヶ台番楽の獅子舞の耳が取れかかっている理由は、冬師の獅子舞に噛まれたためであると伝わっている。
- 12) 試料繊維の屈折率に応じたマウント剤を用いて繊維を透明化させることで、異物の付着様子などの観察を行うことが容

易となる。この時、透明化したい繊維の屈折率に近いマウン
ト剤を使用する。

- 13) 平尾良光, 戸津圭之介編『仏像・漆工芸品・染織品を探る』
国土社, 2000, p.45-46
- 14) 古典時代以前からヨーロッパ絵画で用いられた顔料。海緑
石と灰緑石から出来ており、水酸化鉄・水酸化マグネシウ
ム・ケイ酸アルミニウム・カリウムなどから成る。顕微鏡で
は青い粒子が見えることがある。(R.J. ゲッテンス, G.L. ス
タウト, 森田恒之訳『絵画材料事典』美術出版社, 1973,
p.113)
- 15) 藍から製した染などを藍甕に仕込み、青藍を白藍に変えて
藍染出来る状態にすることを藍建という。藍建は灰汁と小麦
粕と石灰による灰汁建が一般的な手法である。
- 16) 河村瑞江, 山本麻美『木綿織に関する研究—越原家の縞帳
2冊目調査を中心として—』名古屋女子大学紀要(家政・自
然編) 43号, 1997, p.31-44
山本麻美, 河村瑞江『江戸・明治期の縞帳の比較研究(第1
報)』名古屋女子大学紀要(家政・自然編) 45号, 1998,
p.41-53
- 17) 佐貫尹『続木綿伝承』染織と生活社, 2009, p.37-38
- 18) 日本で最初に紡機を輸入したのは、鹿児島紡績所で慶応3
年(1867)に運転を開始した。明治10年代になると政府は
官営による綿紡績業育成を決め、2カ所の模範工場と全国10
カ所に紡績工場を建てたが、技術不足により長く続かなか
った。近代的な技術的基礎の上に建った最初の紡績工場は、明

治16年(1883)に運転を開始した大阪紡績四貫島工場であ
る。(内田星美『日本紡織技術の歴史』地人書館, 1960,
p.115-128)

- 19) 高木進, 稲本直樹, 中原勝儼, 山崎昶編『化合物の辞典』朝
倉書店, 1997, p.224
- 20) 朽津信明, 中牟田義博, 三木孝『日本における緑色顔料「緑
土」の使用について』日本文化財学会誌 46号, 2003, p.55-
66
- 21) 平安時代中期に編纂された『延喜式』縫殿寮雑染用度条
に、藍と黄檗で緑色を染める方法が記されている。
- 22) アントラキノン染料は染色的性質から媒染染料、酸性染
料、建染染料、分散染料などに分類される。フタロシアニン
染料は有機顔料として発展し、直接染料、硫化染料、建染染
料、反応染料など多くの部属の染料がある。(横手正夫, 芝
宮福松『合成染料』日刊工業新聞社, 1978)

参考文献

- 本田安次『山伏神樂・番樂』齋藤報恩会, 1943
公立大学法人国際教養大学地域環境研究センター『秋田民俗芸
能アーカイブス』<http://www.akita-minzoku-geino.jp/>
秋田県鳥海町教育委員会『本海番楽—鳥海山麓に伝わる修験の
舞—』由利本荘市教育委員会, 2006
伊藤征司郎編『顔料の事典』朝倉書店, 2000
山崎青樹『草木染の事典』東京堂出版, 1981



写真1 役内番楽翁衣装 役内番楽保存会所蔵（筆者撮影）



写真2 本海獅子舞番楽二階講中翁衣装 本海獅子舞番楽伝承者協議会二階講中所蔵（筆者撮影）

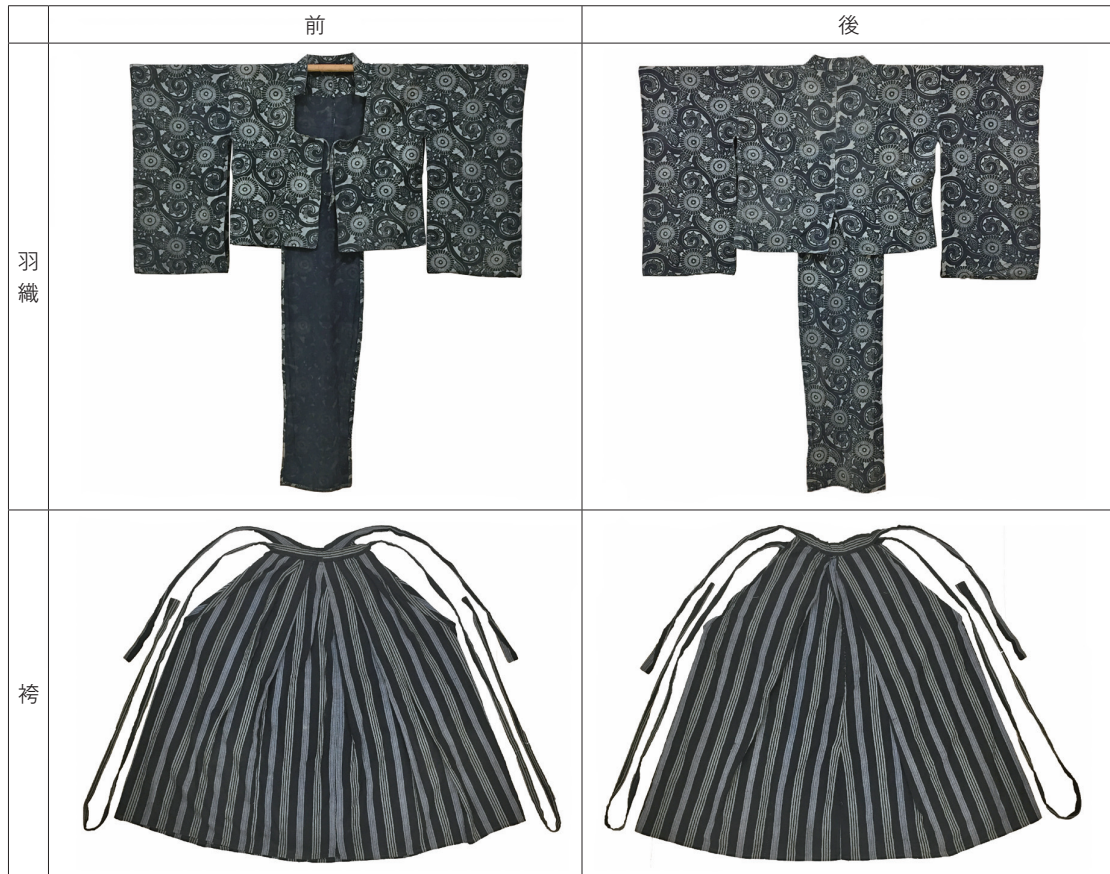


写真3 冬師番楽翁衣装 冬師番楽保存会所蔵（筆者撮影）



写真4 釜ヶ台番楽翁衣装 釜ヶ台番楽保存会所蔵（筆者撮影）

表1 調査結果一覧

| 番楽名称 | 衣装名称 | 染織技法 | 部位 | 色 | XRFによる検出元素 | インディゴ (HPLC) | 推定顔料および染料 |
|---------------------|------|------|------|---|---|-----------------|-----------------------|
| 役内番楽 | 単衣 | 筒描染 | 鶴の頭 | 赤 | Al、Si、P、 S 、K、 Hg | | 朱 |
| | | | 鶴の顔 | 灰 | Al、Si、P、Cl、K、Ca | | 墨と胡粉の混合 |
| | | | 鶴の目 | 黒 | Al、Si、P、Cl、K、Ca | | 墨 |
| | | | 鶴の嘴穴 | 茶 | Al、Si、P、Cl、K、 Ca 、 Fe | | 酸化鉄系顔料（ベンガラ） |
| | | | 背景 | 茶 | Al、Si、P、Cl、K、Ca、 Fe | | シブキ 鉄媒染剤 |
| | 袴 | 筒描染 | | 青 | | ○ | 藍 |
| 本海獅子舞 番楽 二階講中 | 長襦袢 | 描繪 | 虎の体 | 灰 | Al、Si、S、Cl、Ca、Fe、Zn | | 墨（水による量し） |
| | | | 輪郭線 | 黒 | Al、Si、S、Cl、Ca、Fe、Zn | | 墨 |
| | | | 笹の葉 | 緑 | Al、Si、S、Cl、Ca、 Fe 、Zn | | 緑土 |
| | 袴 | 型染 | 腰部 | 緑 | Al、Si、P、S、Cl、K、 Ca 、 Ti、Cr、Mn、 Fe 、Cu、Zn | ○ | 藍と黄色染料による重ね染め 鉄媒染剤 |
| 冬師番楽 | 羽織 | 型染 | | 青 | | ○ | 藍 |
| | 袴 | 織縞 | | 青 | | × | 青色合成染料 |
| 釜ヶ台番楽 | 羽織 | 型染 | | 青 | | ○ | 藍 |
| | 袴 | 織縞 | | 青 | | ○ | 藍 |

※太字による元素記号の表記は、分析箇所元素分布で相対的にピークが大きいものを表した。